



とう とうだいもり パフィン島の灯台守

モーパーゴ作 デイヴィス絵 さとうみかむ ひょうろんしゃ
佐藤見果夢訳 評論社

嵐あらしの夜よる、パフィン島沖とうおきで遭難そうなんしたぼくは、灯台守とうだいもりのベ
ンに助けたすられました。五歳ごさいでした。あれから十二年じゅうにねん、ぼ
くは、ベンのことをわすれることはありませんでした。
学校がっこうを卒業そつぎょうし、パフィン島とうにもどったぼくを、ベンは
変わからぬボサボサ頭あたまでまねきいれました。もうひとりの
お客まよ、けがをした一羽いちわのパフィン
とともに。ふたりでパフィンの世話せわ
をしながら暮くらすうちに、ここがふ
るさとのように思おもえていました。
そんなある日ひ、ぼくに軍隊ぐんたいへの
召集令状しゅうしゅうじょうが来たきのです。

